

老子と『道徳経』及び「環境問題」の解決（Ⅰ）

—「環境問題」の現状と老子

耿

順

一 はじめに

人類には、今日まで数千年の文字による記録の歴史があった。この歴史には、数多くの「名人」及び「名著」などが誕生して遺されている。社会的に「名人」及び「名著」を見れば、これらは信仰や権力や社会制度のもとで人々及び人類社会に影響力を有する。この影響力の大きさなどから見れば、一時的或いは長期的、地域的或いは世界的な違いがある。なお、特徴から見れば、人々に幸福或いは不幸を与えるか、人類社会に未来をもたらすか或いは無くすかという違いがある。これらの違いにより、「名人」は「聖人」であるか「罪人」なのであるか、「名著」は「宝典」であるか「謬論」なのであるかと見分けられ名付けられることがある。

ところで、今日の人類は、およそ 18 世紀前後のイギリスをはじめとするヨーロッパから広げられてきた科学技術・産業革命・経済主義社会制度によってもたらされた「環境問題」に直面している。この「環境問題」は、大雑把に見れば、初期の地域的な公害から地球全体の問題に広げられ、かつ大気圏外の問題にまで拡大された。なお、その害により、人類を含め多くの動植物が死なせられたり、種として絶滅させられたり、奇形の次世代を生ませられたりしてきた。

さらに、自然種である人類を含め多くの動植物遺伝子の組み替えなどが行われ、そしてクローン人間を含める異質の動植物が作られてきた。また、これらの状況の拡大及び深刻化につれ、世界の各地で多くの人々の安定した生活環境が失われて社会が不安になったり、後世に甚大な負の遺産が遺されたりしてきた。それから、これに止まらず、最も肝心なことは、状況がこれから一層深刻化する傾向にあることである。今日、この傾向を食い止め、人類の未来が無くされないようにするには、まず様々な影響を与える「名人」が「聖人」であるか「罪人」なのであるか、「名著」が「宝典」であるか「謬論」なのであるかを確認して見分け、かつ今日の「環境問題」を解決する唱えをする「名人」及び「名著」も含めてその真意、論理、方法などを再検討する必要があると考えられる。これにより、「環境問題」をもたらす本当の原因を見つけ、それを克服できる論理や方法などを選出し、「独り善がり」や「嘩衆取寵」や「妖言惑衆」や「強権暴力」などの「名人」及び「名著」などを見破って投げ捨て、「奇談怪論」や「一孔の見」や「狂言空談」などの「名人」及び「名著」などを見抜いて、人類社会が過誤や野心や私心などに誘導されないようにする必要があると思われる。

このようなことに基づき、本文は「環境問題」を解決する視点から老子と『道德経』を検討してみることにする。

二 老子

老子は、今日一般的に 2576 (紀元前 571) 年前、中国河南省鹿邑東厲郷曲仁里に生まれた自然哲学者であると思われる。なお、現在地元において毎年3月5日にその誕生を祝う活動が行われている。

だが、老子は今日から見れば、二千数百年前の人であるので、その年齢などについて、色々の研究が為されてきているけれども、依然として様々な説があり、一致した認識が出ていない状況である。なおさら、老子は実際に存在していたかという疑問もある。この状況のもとに、老子の存否や履歴などの事実確認は現在の条件などによって別とし、主な関係歴史文献における記録などを参考にしてその概況及び人物像などを概観して見る。

「老子」という名前であるが、「老」は姓であって「子」は今日尊敬の意味を含める「先生」という肩書きであると思われる。しかし、ここの「老」は姓であるという説に対して、漢代司馬遷の『史記・老子韓非列伝』に「老子は中国春秋時代(約 2600 年前) 楚国苦県(現在河南省鹿邑東) 厲郷曲仁里に生まれ、姓は李、名は耳、字は聃(たん)である。」という記録がある。こうして、「老子」か「李子」かという疑問が生じてくる。ところが、これについては昔には「老」と「李」が同じであるという音訓学の解釈がある。

老子の履歴や学問及び行方などについては、『史記』において「周(東周)の図書館管理役を担当したことがある。」、なお「老子は、道德を修め、その学は自隠無名

を務とする。周に久しく住んできたけれども、その国勢の衰微を見て、そこを離れた。ところが、關(今日陝西省にある函谷関と思われる)を出ると、關令である尹喜に出逢い、“先生は隱遁へお出でになるだろう、お書を著していただけませんか”と、尹喜にお願いされた。そのため、老子は、五千字余の上下二篇による“道德”を内容とする書を著して離れ去った。その後、行方は分からなくなった。」などの記録がある。

その学問の伝承には、老子について学んだ人がいると記録している書物がある。例えば、『文子(『通玄真経』とも呼ばれる)・道德』という書物において、「平王は文子に、吾は子が老聃に道をお学びになったとお聞きしたと言い、……」や『列子』において「陳大夫は、“吾が国にも聖人がいます。子は知りますか。”と聞いた。“その聖人は誰ですか。”と(叔孫氏に)聞かれ、“老聃の弟子であって亢倉と謂う。(彼は)聃の道を得て耳で見、目で聞くことができる。”と答えた。」や『莊子』において「老聃の役に庚桑楚という人がいる。彼は偏(ひとえ)に老聃の道を得、北の畏壘山に居る。」などの記述がある。

老子の人物像については、今まで色々の研究や解釈などが行われてきたけれども、一般的に見ればほとんどはっきりしていない状況である。だが、以上の関係記録から覗える特徴のほか、次の関係記録から幾つかの特徴を覗うことができると思う。

まず、『莊子・天運』においては、「孔子は、老聃へ会いに行って帰ってから三日経っても何も話さないままである。弟子は“先生は老聃へお会いになり、何のご指教をなさったのでしょうか。”と訪ねた。孔子

は“吾は今度龍を見たようだ。龍は、合わせると体になり、散ると章になり、雲気に乗って陰陽を養(ぎよ)する。(会うと、)吾は張口結舌になるだけだ。そのような老聃に指教する何か、あり得るのか。”と話した。」という記述がある。

なお『史記・老子韓非列伝』においては、「孔子は、周の老子へ礼を問いに行った。……孔子は帰って弟子に“鳥に対して、吾はその飛ぶのを知る。魚に対して、吾はその泳ぐのを知る。獣に対して、その走るのを知る。走るものに対して罔(あみ)を使うことができ、泳ぐものに対して綸(いと)を使うことができ、飛ぶものに対して矰(いぐるみ)を使うことができる。(だが)、龍に至っては、吾はそれが風雲に乗って天を上るのを知ることができない。今日出逢った老子は、まさに龍なのだ。”と話した。」という記述がある。

さらに、『莊子・天下』において「……老聃という人は、古代の博大真人である。」という記述がある。

しかし、このような記録などに対して、「孔子が死んだ129年目、“周の太史である儋は秦の献公に会い、秦は周と合併し、その後500年過ぎたら分離し、なお70年過ぎると霸王が出るのだと言う。”と記録する史書がある。この儋は、即ち老子であるとの言い方もあり、また老子ではないとの言い方もある。これらの言い方のどれが正しいかは、皆判断できないのである。

老子という人は、隠君子である。」及び「老子は160歳以上、また200歳以上とも言われる。彼は修道によって寿を養うのである。」というような記録内容は『史記』にもあるのである。

以上の記録などによって見れば、老子(聃)という人物が存在していたかと思われる。ただ、一般的に見れば、一定でなく高すぎる「年齢」の問題や不明な「行方」の問題がある。なおこれらに、『莊子』や『史記』に記録されている老子に対する孔子の「龍」である譬えの人物像を加えて、老子はほんとうに存在していたかという疑問が生じて不思議がないと思う。ところが、「修道によって寿を養う」や「隠君子」や「隱遁」などの記録によって考えてみると、「年齢」が高くて、「行方」が分からなくても、超人力があっても不思議とは言えないので、その存在を否定するには根拠不足であると感じられる。

いずれにせよ、人物の存否や人物像に対する追究より、老子における思想——自然観、宇宙観、人生観などを検討して、今日の「環境問題」を解決する理論などを見つけたりする方が大事であると考えられる。

また、もし追究するならば、なぜ『道德経』のようなものができたか及びどのような才能があったらそれを書けるかについて進めることは重要であると思われる。